

2022年10月16日 聖霊降臨節第20主日礼拝

メッセージ「胸の中へ」

岡嶋千宙伝道師

聖書 エレミヤ書 31章27-34節

先日、車イスで生活をされている方のヘルパーとしてお仕事をしていたとき。何人かのヘルパーがその方のお宅を訪れて生活支援をしているのですが、その日のわたしの担当は、お食事の準備でした。すぐ隣、目の届く範囲で、他のヘルパーさんが別の作業をしている状態です。準備も終わって、調理をし始め、しばらくの後、他のヘルパーさんが声をかけてきました。「ちょっといいですか」とか、そんな言葉。何気ない一言です。それを聞いた瞬間、わたしはビクッ！ 跳び跳ねて驚き、握っていた包丁を落としそうになって、腰の力が抜けて、その場にペタンとしゃがみこんでしまいました。心臓バクバク、動けない！ その時に声をかけてくれたヘルパーさんを含め、わたし以外の人からすれば、そんなに驚くことはないのに、と思われるでしょう。でも、わたしにとっては一大事。というのも、予期せぬことに対する驚き方が半端ないからです。本を読む、料理をする、掃除をする、など、何かひとつのことに集中していると、自分の世界に没頭し、周りが見えなくなるのです。いや、見えない、というより周囲の世界が無くなるに近い。数秒前に隣にいた人、あるいは隣にあったものの存在が消えて、そんな状態で声をかけられたり、物音が聞こえたり、集中していること以外のものが見えたりすると、驚いて固まってしまうのです。幸い、その時は、わたしの特性を知っている方たちばかりだったので、何事もなく済みました。でも、もし、そうではなかったら、人間関係に亀裂が生じていたかもしれません。声をかけてくれたヘルパーさんだけでなく、そのお宅の利用者さんや、事業所にも迷惑をかけていたでしょう。

予期せぬこと。個人的な場面だけではなくて、もっと広い文脈でも起こりうるし、現に起こっています。世界規模で拡大した新型コロナウイルスの感染。日本だけではなく各国で発生し続ける大型の台風や大規模な災害をもたらす集中豪雨などの自然災害。さらに、これまでの紛争が鎮圧する道筋も見えない中で、新たに勃発する民族・国家間の争いの数々。これまでの当然、当たり前が妥当しない世の中。至るところで、その頻度を加速度的に増加させて、予期せぬ出来事が起こっています。「こうであるはず」がそうならない。「こうであるはずがない」がそうになってしまう。次々に起こる事態に対して、抜本的な解決を見いだせず、ただただ時間が過ぎていっているように思えます。そして、人々の生活が犠牲になり、命が蝕まれていっています。いったい、どうすればよいのでしょうか。これからの世界に、未来はあるのでしょうか。あるとしたら、それは絶望の世界なのか、それとも、希望の世界なのか。本日は「エレミヤ書」に記された言葉を頼りに、その問いに対する、神様の答えの一端を、みなさまと共に探してみたいと思います。

わたしがメッセージを担当した2ヶ月前の主日にて、同じく「エレミヤ書」の御言葉を聞きました。その時にも確認したのですが、「エレミヤ書」には紀元前620か

ら 580 年くらいのことが描写されています。舞台となっているのは現在のイスラエル、パレスチナがある地域にあったユダ王国。その国の末期。ユダの北東に台頭した新バビロニア帝国の圧力を受けて、外交の面でも内政の面でも、国中が混乱の渦に巻き込まれていた時でした。この書の主人公、神の預言者として活動していたエレミヤは、この混乱は、国の滅亡という形で終結に至る、と人々に伝えていました。これまでの人々の行い、生き方の報いとして、国の滅亡は避けられない。ユダの人々は、遠い先祖の時代から彼らを生かし導いてきた神、主ヤハウエを忘れ、背き続けてきた。その報い・裁きとして、国が滅ぶのだと。4 章には、滅ぼされた後の将来の国の有り様が記されています。「土地は荒れ果て、実りもなくなり、山は揺れ、人も鳥もあらゆる生き物がいなくなり、空の光が消えて、そして、世界は混沌となる」(4:23-26 要約)。ここで語られたその有り様は、実際、紀元前 586 年、新バビロニア帝国の攻撃を受けたユダ王国が徹底的に壊滅されたことによって現実のものとなります。これだけを聞けば、絶望です。「エレミヤ書」全体を通してみても、神の預言として語られるのは、その大半が、人々の罪に対する裁きと、その結果としての王国の滅亡で占められているので、やはり、神が与える未来は、絶望の世界なのかと思いたくもなります。だけれども、あるいは、だからこそ、なのでしょう。そんな中でも、希望の言葉が語られます。本日、わたしたちに与えられているのも希望の言葉のひとつ。

神は語ります。絶望で終わることはない。絶望が希望に変わる日が来る。その希望が訪れる日、「その日」に、「新しい契約」がもたらされる。ここで語られる「新しい契約」という表現。ユダの人たちにとって「契約」という言葉、あるいは考え自体は、決して新しいものではありませんでした。むしろ人々の生活全般において、信仰的な支柱となっていた大切なもの。契約は、これまでも、エレミヤの時代よりずっと前から、ユダの民族の歴史を通して、神から与えられてきたものでした。特に、人々が困難に直面するとき、神は人々に、彼らが神とどんな関係にあるのか、ということ伝える手段として「契約」を用いてきたのです。聖書に記されているもので、最も有名なのは、モーセを通して伝えられた「シナイ契約」。その中で、神は、「自分はあなたたちの神である。あなたたちを創り、命を与えた神として、あなたたちを生かし、導き続ける」と約束しています(例:出エジプト 20 章)。その契約が新しくされる。契約が新しくされるという思想は、別の書物にも記されています(例:ホセア 2:20-24)。ですが、「新しい契約」という表現は旧約の中で唯一ここだけです。では、何が新しいのかというと、それは、契約の内容ではなくて、与えられ方。33 節「私がイスラエルの家と結ぶ契約はこれである。…私は、私の律法を彼らの胸の中に授け、彼らの心に書き記す」。それまでの契約、例えば先ほど触れたシナイ契約は、物理的なもの、その時は石板でしたが、そこに書かれたものでした。物質を媒介にして、書かれたものが間接的に人々に伝えられるという形です。これに対して、エレミヤが語る新しい契約とは、石板などの物理的なものを介さず、人々の「胸の中に授けられ、心に書き記される」もの。つまり、それぞれの人の内面に直接に与えられるのです。そして、その結果「小さな者から大きな者にいたるま

で、「(人々は)皆(神)を知る」と言われています(34節)。「知る」というのは、単に知識として何かを覚え、理解するというだけではありません。理解したことがら、それを知った人にとっての一部になることを意味します。だから、ここで「知る」と言われるのは、神と人との全人格的な交わりの内にあること。神と人が共にお互いを知り、深い交わり、深い関わりの中にあるのです。

「エレミヤ書」の別の箇所では、人々が、これまでも神と契約関係にあったのにも関わらず、神を知ることは決してなかった、と記されています。例えば、9章2節「(人々は)真実ではなく偽りをもってこの地にはびこっている。悪から悪へと彼らは進み、(彼らは)私(神)を知ることがない」。あるいは、同じ9章の5節「(人々は)私(神)を知ることを拒み、欺き続けた」(9:5)。そして、別の箇所では、その原因が「人々の心がかたくなで悪い」からだと言われています(3:17, 7:24, 9:13, 11:8, 13:10, 16:12)。本日の御言葉33節にもある「心」が、「かたくな」になる。先に見た通り、当時は、外国勢力からの絶え間ない圧力もあり、政治、経済、宗教、文化といったところで、国中が混乱していた時期でした。一部の人は、希望を見いだせず、「もうダメだ。何をやっても無駄だ。自分たちは滅びる運命にある」と諦めていたかもしれません。どうせ、変えられない。どうせ、変わらない。他方で、そんな状況でも、何とか活路を見いだそうとして、神の救いを必死に求めた人もいたことでしょう。このままでは、ますます状況が悪くなるばかりで、本当に国が滅びてしまう。そうなれば、自分たちの生活も危うい。命すら失うことになるかもしれない。どうしたら状況が改善されるのか。自分たちの生活を上向きにするためには何をすればいいのか。神の祝福を再び受けるために、どう生きたらいいのか。

そんな思いの結実が、エレミヤの活動初期に、当時のユダの王様ヨシヤによってなされた宗教改革でした。王ヨシヤは、それまでの悪行や悪習を改めて、神の望む善を王国全体に取り戻そうとしたのです。ですが、結局、この改革は道半ばで途絶え、その後、王国は滅亡への道へと突き進むこととなります。人々の必死の求めがあったにも関わらず、滅亡へと向かっていったその理由。ヒントとなる言葉は「かたくな」です。神を求める人々の心がかたくなになっていた。その心が固くなっていた。もうダメだと諦めたにせよ、王国滅亡とそれに続く自分たちの境遇の悪化を避けることに必死になっていたにせよ、人々は、見失ってしまったのではないのでしょうか。神を、神の創った世界を、そこに住む人間という存在を。それぞれの姿と、それぞれの間にもたらされる関係性を、一方的に固定化させ、理解するようになっていた。知らず知らずのうちに、自分たちの許容できる範囲に、すべてを閉じ込めようとしていた。「これまではこうだったから、今度もこれが正しいはず。」「これまでのやり方で上手くいかなかったのであれば、別の方向性としては、こうであるに違いない。」あるいは、「今までもこうだったのだから、どうあがいてもこの状況は変えられない。」そうやって、神、世界、人間を狭い価値観に押し込んでいったのでしょうか。そして、身動きのとれなくなった状態が作り出され、変化がなくなり、言わば、死んだ状態が生じていたのです。エレミヤの語る新しい契約とは、そんな状態

に対して NO を突きつけます。かたくなになった人々の心を解き放ち、固定化された世界、神、人間の姿を揺さぶります。これまでのあり方、常識、当たり前、といった枠にはめられて、がんじがらめになり、動きを止められた状況に風穴を開けるのです。動きに満ち、命に溢れ、変化に富んだ世界の現実が、新しく描き直されていく。人間が打ち立てた国家という制度の中で通じる法律や規則の枠、神を礼拝するという名目で行われる儀式や祭儀などの宗教的営みの枠、あるいは、単純な善悪の判断に基づく道徳規律の枠に押さえ込まれることはありません。それらによって固定化されていた人間の命が、人間を含めた命の満ちる世界が、そしてすべての被造物と創造主である神との関係が、常に変わり続け、動き続けるものへと新たにされるのです。神の息が新たに吹き込まれた存在として、人が、命あるあらゆる生き物たちが、生きるようになる。それが、新しい契約によって約束された世界です。

予期せぬ事態の連続の中に生きるわたしたち。当たり前を越えて、日常を脅かす出来事の数々。そんな状況で、もうダメだ、どうせ変わらない、と諦め、動きを止めることもあります。反対に、事態を解決するために、なんとかしようと思死になり過ぎて、身動きがとれなくなることもあります。あれをしなければダメ。これがなければダメ。これさえできればいいのに。そんな思いにからめとられて、そして、そう思えば思うほど、ますます、世界が狭められていきます。一人ひとりの歩みが窮屈なものになり、神の姿、神の救い、神のもたらす希望が、遠ざかっていきます。そんな今だからこそ、固まりそうになるわたしたちの心を解き放っていく必要があります。かたくなになり、動きを止めそうな心に、もう一度変化を、動きを、もたらしていくのです。でも、どうやって？ エレミヤを通して語られた神の希望を、それから約 600 年後に、別の形で伝えた人イエス。彼の時代においても、エレミヤの時代と同じように、社会が混乱していました。ローマ帝国による圧政のもとで、人々は苦しい生活を強いられ、そして、やはり、人々の心はかたくなになっていました。状況改善のために、必死で、それまでの伝統として行われていたことを守ろうとしたり、あらゆる事柄に善悪の基準をもうけて「悪い」と思われることを排除しようとしたり、あるいは、どうせ自分たちはこういう運命にあるのだからと諦めたり。人々の生活が、固まり、余白がなくなり、動きのないものになっていたとき。そんな状況に、動きに満ちた命の息を吹き入れたのがイエスでした。当時の宗教的常識、人間の規定する善悪の基準、そんなものを気にせず、ものともせず、目の前にいる人たち、とくに、世の常識や社会通念にがんじがらめになって苦しむ人たちのもとに出向き、自分の身体を通じて、交わったイエス。その人たちに寄り添い、その人たちのそばで、一人ひとりの生の現実を、動きに溢れ、変化に満ちた、一人ひとりの命のあり方をしっかりと見つめ、大切にし、慈しんだイエス。そのイエスは語ります。あなたたちの間に、真ん中に、神の国がもたらされている。これからの日々、イエスの姿を覚え、わたしたち自身が、イエスと共に、イエスと同じ歩みをなせるように、祈り求めます。この世界が、絶望で終わるのではなく、希望の未来へと進めるように、みなさまと共に、イエスと共に歩み続けたいと願います。